共生委員会ニュース

ともしび

2023 年度　第 1 号

2023 年 5 月

共生探究学習委員会

◎共生委員会ニュース「ともしび」とは

スクールモットー「地の塩、世の光」

共生探究学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。
高等部の3年間を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の諸問題について考えていきましょう。
この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声を皆さんへお届けします。
他の人の経験を共有し、深く考えるきっかけとして下さい。

◎高等部の平和共生教育

修学旅行、各教科の授業などで平和と共生について学び平和共生 LogBook 足跡を残していきます。

3 年間の流れ（22 年度）

1 年生《平和共生論文》テーマ選定
【聖書】杉原千畝の生き方を通して　　【現代の国語】ベトナム戦争に関する小説など
【英語】Playing the Enemy（アパルトヘイト撤廃後の南ア ラグビーワールドカップ）
【生物】放射線被曝の影響

2 年生《平和共生論文》アウトライン作成・執筆
【聖書】内村鑑三の生き方を通して【現代文 B】長崎の原爆に関する作品
【日本史 A（現代史）】太平洋戦争、アウシュビッツ収容所、原爆の歴史、ベトナム戦争
【現代社会】日本国憲法第9条、核兵器【英語】Irena Sendler の人生を通して
【物理】原子力と核兵器【修学旅行】被爆の歴史、キリシタン弾圧の歴史

3 年生《平和共生論文》完成・読み合い等
【聖書】M・L・King Jr 牧師の生き方を通して　　【英語】共生に関するテーマ
◆その他、グローバルウィーク、礼拝、自主学習グループの活動など。

グローバルウィーク

フィリピンプログラムイベント開催！

2 年 T.A.

去る2月20日の昼休み、2階の PS講堂前でフィリピンの支援チャイルドに手紙を書くイベントを開催しました。会場に用意されていた付箋には**「Ako si」**と書いてありましたが、これは、タガログ語で「私の名前は～」という意味です。参加してくれた 1、2 年生の皆さんには、その付箋に自分の名前を書いてもらいました。　参加してくれた150人の生徒のみなさん、ありがとうございました！

フィリピンのチャイルドには、主にクリスマス献金を通じて支援をしています。そして献金はチャイルドファンドジャパン(CFJ)という団体に寄付され、衛生管理や親のためのトレーニング、健康診断や学習支援などに使われます。

高等部では3人のチャイルドを支援していて、集まったメッセージは、今年度からの新しい支援チャイルドの**ケルヴィン君(13歳)**に送られる予定です。
今回のイベントをきっかけに、フィリピン支援について興味を持ってくれると嬉しく思います。そんな興味がある人のために、フィリピンプロジェクトでは、勉強会を開いたり、クラスルームを通じてフィリピンに関する情報を共有しています。誰でも入ることができるので、ぜひ気軽に参加してみてください！

[クラスコード：＊＊＊＊＊]





修学旅行平和講講演会感想

2 年 S. H.（お話：松尾幸子さん）

お話を聞くまで、原爆による被害を体験したと人々は、被害を受けた直後も悲しみにさいなまれていたのではないかと思っていた。しかし実際にお話を伺ってみて、「悲しい」という感情よりも虚無感に近いものを感じとった。松尾さんのお話の中で、原爆投下についてや、それにより亡くなった人々に関して「悲しい」と思ったとは一切語られておらず、原爆投下から3週間近く経った8月28日にお父様が亡くなったとき、初めて「人が亡くなって悲しい」と感じたとおっしゃっていた。人間は大きな衝撃や事件に出会った

時、感情が大きく突き動かされるのではなく、何も感じなくなる、と前にどこかで聞いたことがある。松尾さんのお話の中で、淡々と事実のみを伝えられた印象を受けたことから、むしろ原爆により自らが生まれ育った場所が破壊され、家族や知り合いが次々と亡くなっていったという事実が、松尾さんにとってどれほど衝撃的で大きな出来事だったのかということを少しだけ想像することができた。

また、原爆による被害や受けたトラウマ、家族や友人などの死に面した苦しみが、今なお被害者の方々について回り、さいなみ続けているのだと感じた。　例えば、原爆投下から50年後になって当時の山里国民学校にいた人が集まった際、1500人ほどいた児童の内1300人ほどが原爆によって亡くなったという事実を知った、という話や、被爆が直接の原因かはわからないが、様々な病気にかかり苦しんだ話などから私はそれを感じた。その苦しみを常に感じ、それを後世に伝えようと活動されている松尾さんの口から出た「一日でも早く核兵器がなくなってほしい。」という言葉には、今まで聞いた同じような言葉よりもはるかに重く、そして深く心にのしかかってきた。

現在の世の中では、ロシアとウクライナの戦争や米中関係など、様々な問題が起こっている。その中で、核兵器は再び世界中を悲惨な場所へと変えてしまうかもしれない。これからの未来を担っている私たちだからこそ、松尾さんの苦しみをしっかりと受け止め、二度と世界に悲惨な場所が生まれないよう考えていかなければならないと思った。そのためには、これからも世界の情勢について、その原因となっている歴史を知り、考えていくことが重要だと感じた。

1 年生対象・平和共生論文発表会

3 月15日（水）、1 年生に向けた平和共生論文発表会が開催され、71期代表生徒のS.R.さん・S.T.さん、S.A.さんの3人が、春休みに テーマを考える後輩達に向け、自分がテーマを決めたきっかけをわかりやすく話してくれました。

73 期生にとって来年度は論文執筆の準備が本格化し、実際に執筆する大事な年です。先輩が伝えてくれた論文への熱い思いを受け継ぎ、良い論文を書いて下さい。

72 期生はラストスパート!始業式の日に提出される論文を、楽しみにしています。

（共生・探究学習委員会）

東日本大震災風化防止イベントに関連して

2 年 S. M.

皆さんの中には「どうして高等部は宮古にこだわっているのだろう」という微かなギモンが頭の中をよぎったことがある人がいるかもしれません。逆に今、「確かになんでだろう」と思った人もいるでしょうか。そのギモンをもつことは、半分正しくもあり、誤りでもあるのではないかという風に私は考えます。

皆さんは、「東日本大震災の被災地」と聞いてどこを想像するでしょうか。おそらく、「東北」が思い浮かんだ人が多いと思います。しかし、被災地に関しては必ずしも東北だけではないのです。実際、東日本大震災における人的被害や建物の損壊があった範囲は、北海道から三重県にいたる18都道県‹1›という『東日本』全域に及んでおり、それが「東日本大震災」と呼ばれる一つの所以なのだと思います。

今回汐留シオサイトで開催されたイベントには東北4県（青森・岩手・宮城・福島）それぞれの詳細な展示がありましたが、それらを通して率直に、宮古だけではない何千もの被災した市や地区があるのだということを実感しました。それも東北に限らない。日本の他の地域や、直接被害は受けていないけれども恐ろしい

ほどの映像を見て心に傷を負った国内外の人々がいるかもしれない。物理的・精神的、その両側面からの被災が星の数ほどの場所・もの・人に及んでいるのです。(後に紹介する畠山さんは「心の瓦礫」と表現しています。) そう考えれば、一番初めのギモンは正しいようにも見えます。他の地域というか、東日本大震災という全体像に目を向けたほうが良いのかもしれないからです。だけど本当にそれだけでいいのか。広範囲に及ぶ被害に対して、東日本大震災の死者・行方不明者は宮城・岩手・福島で全体の99.7%を占めており‹1›、集中的と言えます。特に三陸は津波による甚大な被害を受け、宮古もそのような場所の一つです。

私は宮古以外の地域にも触れてみることで何かヒントになるかもと思い、復興支援漫画‹2›を読んでみました。これは震災当時、宮城県石巻市の中学校校長をしていた、畠山卓也さんの足跡を追ったものです。震災直後から避難所運営に尽力され、その後もアクティブに活動をされています。石巻もまた、津波によりほぼ全域に被害を受けました。漫画は驚くほど臨場感があり、読み終わるのに 1 時間もかからないのにも関わらず、心を何回も揺さぶられたような感覚になりました。ぜひ皆さんに読んでいただきたい一冊です。

「来て 見て 伝えて」。被災地に足を運んで実際にその目で見ること、そして見たこと・感じたことを伝えること。これは畠山さんが会った人に必ず言っていることだそうです。同時に、私はこれが、津波を直接経験していないけれども(した方もいるかもしれませんが)同じ時間を生きていた人が、進んでしていかなくてはならないことなのではないかと思います。今にして思えば、宮古訪問プログラムは、この「来て 見て伝えて」を体現している(伝えるアウトプットについては今も模索中ですが)ような気がします。

だから、東日本大震災や防災など全体としての大きなテーマをみるのももちろん大切ですが、宮古訪問プログラムを始めとして宮古という地域にフォーカスし、関心を向け実際に訪問するということには確実に意味があります。一つの地域と親密になり、何年にも渡って交流を持つことは、震災そして復興を肌で感じるための最も重要な第一歩です。細部を見ていなければ、心と心が通っていなければ、感じられないこと、知ることができないないことがたくさんあるはずです。



「高等部はどうして宮古にこだわっているのだろう」というギモンは「他にも目を向けようよ、他にも色々な地域もあるのでは、他のテーマはやらないのかな」という気持ちの現れでしょうか。高等部は宮古との交流を震災直後からコンスタントに続けています。宮古は数ある街や市の中から、縁によって巡り合った大切なパートナーであるのです。一方、防災備蓄品配布やそなエリア東京見学など、総合的な防災・減災、復興、風化防止といった様々なテーマに挑戦しているのも高等部の宮古訪問プログラムの特徴でもあります。先程このギモンをもつことが半分正解半分間違いと言ったのはそういう理由です。これからも宮古について深めたり訪問したりした中で得たことをベースに、ニュートラルな立場から物事を多角的に考えていきたいと思います。

‹1›東日本大震災 復興の検証:どのようにして「惨事便乗型復興」を乗り越えるか』-綱島不二雄 他著 p.72
‹2›『3.11 震災の語り部 畠山卓也 ～石巻からの声～』ー阿部国之 作画／畠山卓也 監修

日本滅亡の瀬戸際に立った Fukushima50 の4日間

2 年 A.I.

皆さんは吉田晶郎さんという人物をご存知でしょうか。彼なしには今の東京はなかった、と言われることもあるほどの人ですが、その名を知っている方は少ないと思います。2023年3月11日で東日本大震災から12年を迎えたことに加え、先日宮古訪問プログラムの一環で、映画に登場したものと同様のオペレーションルームを見せていただいたこともあり、今回は吉田さんの活躍を描いた「Fukushima50」という映画を紹介させていただきます。

「Fukushima50」とは、その名の通り、東日本大震災で発生した津波によって、制御不能となってしまった原子力発電所の爆発事故の実態を描いた映画で、その名は「暴走する原子炉と命がけで戦った人たち」を賛え、海外メディアによってつけられたものです。

「10メートル以上の津波が来ることは無い」。その油断から、福島第一原発事故は始まりました。巨大な大津波に襲われた原子力発電所(通称「イチエフ」)は、全電源を喪失し、メルトダウンを起こすかもしれな

い、という危機に直面します。メルトダウン、つまり格納容器から放射性物質が漏れ出すことが実際に発生すれば、福島はおろか、東京を含めた東日本には誰も住めなくなる。最悪の事態を回避するため、1、2号機の当直長を務める伊崎利夫は、「ベント」という、手動で原子炉の安全弁を開け、原子炉から格納容器へ蒸気を逃がすという作業に挑みます。当然、制御不能となった原子炉内に立ち入れば生きて帰れる保証はなく、伊崎率いる当直チームは「決死隊」を編成し、まるで玉砕するかの如く、原子炉建戸に立ち向かっていきます。しかしながら、彼らの思惑通りに事は運ばず、次々と爆発が起こり、2号機に至っては格納容器の圧力が、設計圧力の2倍を優に超えた750パスカルに達し、いつメルトダウンが起こってもおかしくない状況に陥ります。「首くくるしかない」と死を覚悟した吉田所長と伊崎当直長の4日に及ぶ不眠不休の奮闘は、まさに想像を絶するものでした。

映画の最後で、帰還困難区域の中にある桜並木の元、伊崎当直長が「吉やん(吉田所長の愛称)、今年も桜が咲いたよ」とつぶやくシーンがあります。ありきたりにも思えるこのセリフですが、映画を通じていかにその地に桜が咲いていることが奇跡的であるのか、どれほどの苦労と努力があってその桜は咲くことが できているのかを思い返せずにはいられませんでした。

と同時に、その隣には共にあの危機的状況を乗り越えた、吉田さん本人がいないことに気付かされます。そうです、吉田さんはあの出来事から僅か2年後、食道癌で58歳という若さで亡くなってしまうのです。被曝が直接的な原因ではないものの、一部の報道機関では、国家滅亡の瀬戸際に立たされたことによる、究極のストレスが大きく影響したのだと言われてます。自分の命を犠牲にしてまでも福島、そして東日本を守ろうとした吉田さんの姿勢には尊敬と感謝の思いしかなく、彼の行動は語り継がれるべきものだと痛感しました。

当時の東京電力の一貫の収束作業には賛否両論あり、一概にすべて正しかったと言い切ることはできません。ですが、その行程において一人も死者を出さなかったこと、そして何より今、私達が東京に住むことができているのは、彼らの勇気ある行動があったからであるのは歴然とした事実です。この生活ができるのは当たり前なことではない、ということを実感するとともに、人間は自分たちの手に負えないほどのものを生み出し、それを今なお扱っていることに恐怖の念を感じさせられた作品でした。

映画「Fukushima50」は高等部図書館にもおいてあります。渡辺謙、佐藤浩市をはじめとする日本を代表する俳優が揃っており、その白熱した演技にも圧倒されること間違いありません。特に、吉田所長役の渡辺謙においては、本人にしか見えないほど当時の細かな心情が現れており、緊迫した状況がありありと伝わってきます。福島第一原発事故は確かに甚大傷跡を残していったものの、「Fukushima50」の存在がなければ、日本列島はチェルノブイリ原発よりも遥かに深刻な悲劇に見舞われていたかもしれない。その恐ろしい事実に、皆さんもこの作品を通じて気づいていただけたらと思います。